



# 少年

神西

講談社

昭和三十年三月二十五日發行

定價 二六〇圓

著者

神カミ西サイ清キヨシ

發行者

東京都文京區音羽町三ノ一九  
野間省一

印刷所

東京都千代田區神田錦町三ノ一  
大同印刷株式會社  
代表者 井上信明

發行所

東京都文京區音羽町三ノ一九  
株式會社 大日本雄辯會講談社  
電話大阪(94)代表三〇二(二〇)  
振替東京三三九三〇

(著丁本・價丁本はお取りかへいたします)

(大造堂製本)

目次

少年

3

地獄

69

母たち

127

おくがき

191

カバ  
ー  
吉  
田  
健  
男

少年



## ブ　ロ　ロ　オ　グ

私はよく夢をみる。楽しい夢よりも、苦しい——胸ぐるしい夢の方がずっと多い。さめたあとで、ほとんど全経過をたどり直せるほど、はつきり覚えてゐる夢もある。さめた直後は、思ひ出す手がかりすら見失はれて、それなり忘れてゐたのを、かなり後になつて何のきつかけもなしに、ぱつと記憶に照らし出される夢もある。後者には概して楽しい夢が多いやうだ。

同じ主題がしばしば繰り返されるのは、苦しい夢の場合に多い。その主題の立ち返りは、ほとんど一定の周期をなしてゐるやうにさへ思はれる。なかでも一ばん頻繁にあらはれるのは、胸ぐるしい夢で、その堪へられぬほどの壓迫感、むしろ窒息感をかもしだす情景は、私の場合は何よりもまづ、船室の棚床のなかに仰向けに横たはつてゐるうちに、上の棚がだんだん降りてきて、つひに一寸の間もなく壓しかかつてしまふのである。私はもう死ぬと思ふ。それなら一刻も早く死なしてもらひたいと思ふ。だが、もう呼吸する空氣は盡きてゐるのに、私は死ねない。その苦悶の絶頂で、私はやつと目をさます。この船室の棚床には、勿論いろんなヴァリエーションがある。トランク詰めにされたり、突然お棺の中で氣がついたりする。しかし一ばん多く出てくるのは棚床なので、私はこれが原初



の形態であることを、久しい前から承認してゐる。

柵床に寝た経験は、思ひだせば幾らもある。汽車の寢臺もさうだし、青函連絡船や關釜連絡船もさうである。だがさういふものに私が寝たのは、かなり成長してからのことで、その時すでに私の内部感覚には、事前に體驗された形で壓迫感や恐怖感が横たはつてゐた。それは現在なほ尾を引いてゐて、この年になつても私は、なるべくならば汽車は寢臺に乗りたくないのである。そこで、「柵床」の胸苦しい第一體驗は、かなり幼少の頃にあつたものと見なければならぬが、私は先日ふと、同じ性質の或る悪夢から覺めたあとで、十歳のころの最初の船旅の経験を、びつくりするほどまざまざと思ひだした。私は、ああ、あれだ、と思つた。きれいさつぱり忘れてゐた夢が、ぱつと照らし出されるあの瞬間に似てゐた。それに伴つて、夢の細部が驚くべき明確さをもつて生き生きとよみがへつてくるやうに、私には少年時代の或る時期のうすれ果てた記憶が、悦びよりはむしろ一種の恐怖をもつて、ありありと立ち返つて來た。いかに忘れ果ててゐようとも、原罪はあつたのである。

それがまた薄れ消えて行かないうちに、私は急いで書きとめておかうと思ふ。もちろん記憶の闇にむかつて焚かれた瞬間的な照明は、不完全きはまるものに違ひなく、明暗の對比がどぎつすぎたり、露出が必要以上に強調されたりする惧れは多分にあるだらう。それはもう致し方もないことなのだ。

……

その最初の船旅は、前にも言つた通り私の十歳のとき、内地から臺灣へ向つての海路である。季節

ははつきりしないが、夏の終りか初秋ではなかつたかと思ふ。つまり颱風期に遭遇したわけである。父は暫く休職官吏として退屈な月日を送つたのち、母の伯父にあたる宮中の有力者の力添へで臺灣總督府に椅子を得た矢先であつたから、出發の日どりなども加減する餘裕はなかつたのだらう。神戸から乗船したやうな氣もするが、あるひは馬關(つまり下關)だつたかも知れぬ。先祖の墓所が山口にあつて、父は明治の人として、外地への赴任の途次かならずや展墓を忘れなかつたらうからである。船は信濃丸といつた。たぶん日露戦役で名高いあの信號船と同じ船だつたらう。紺碧の空に白い船體をうかべ、おだやかに海波を切つてゐるその繪葉書を、私は長いこと愛藏してゐたが、いつのまにか失くしてしまつた。だが、この船旅についての實際の記憶となると、のちに私の潜在意識の底ふかく根をおろすことになつた密閉感覺ともいふべきものを他にすると、全然ないといつていい。最初の一日ぐらゐは、ひよつとすると晴れて平穩な海路だつたかも知れない。デッキチェアに腰かけた父が、傍に立つてゐる小さな私にライスカレーを一さじ二さじ食べさせながら、その都度わたしが顔をしかめるのを興がつて笑つてゐる聲を、私は妙にあり覺えてゐるやうな氣がするからだ。あるひはこれは、馬關までの汽車の中だつたかも知れない。とにかくこの父子像のあひだに、心配さうに差しのぞいてゐる母のおだやかな微笑があつただけは確かである。

しかしそのあとは、幾日の船旅だつたか知らないが、徹底的に颱風にもてあそばれどほしだつた。三千五百噸の巨體は木の葉のごとく……などと、小學生の作文じみたことも言ひたくなるが、實際はそんなことではなかつた。横ゆれもかなりだつたが、更に怖ろしいのは縦ゆれで、船室の棚床に小さくちぢこまつて寝たつきの私には、少なくとも二三丈はある上下運動として感覺された。それが終日

終夜、いつ果てるともなく續いたのである。くぐりと吸ひこまれるやうな下降感覺の不氣味さ。それにもまして、同じだけまた揺り上げられるときの、息づまらんばかりの壓迫感。……のちに私の見る夢の呪はれた主題になつたものは、たしかにこの後者なのである。

母は何ひとつ喉をとほらず、しかも嘔吐しつづけた。その嘔吐は私にも感染した。同じ船室に祖母もゐたはずだが、これは全然わたしの記憶から脱落してゐる。父だけが至極元氣だつた。開けはなしたままの船室のドアの向うに、食堂らしい廣間が見え、テーブルも椅子も残らず片隅に寄せかけてロープで固定したあとの空間を、父がむしろ樂しげな足どりで巧みに平均をとりながら、飲水をとりにどに去つてゆく後姿を、私ははつきり覺えてゐる。父は頗る樂天家であつた。

航海の最後の日になつて、やつと海は靜かになつた。そして船はその日の夕方ちかく、基隆にはいつた。

## 第一の家

少年の第一印象にのこる基隆は、肌寒い秋雨の港である。ぬれそぼつた上屋が黒ぐる不氣味に立ち並んでゐる岸壁の石だたみを父は出迎への役人たちに傘をさしかけられなどしながら、手荷物を兩手に、何やら高聲で談笑しながら、元氣な大股で歩いて行つた。少年はすぐその後からついて行く。父は足を踏み替へるたびに、靴の底革を一々はつきり見せてゆく。それは濡れて黒ずんでゐた。少年はふと、自分もそんな歩き方なのだらうかと思ふ。彼は和服に、新しい黒の編上靴をはいてゐる。

その頃の父は、煙草をやめてからめきめき肥つた額のひろい顔に、恰好のいいカイゼル髭を生やしてゐた。しかしそれは主として、後年になつて寫眞から植ゑつけられた印象で、現實の父の顔の上にその口髭を見た覚えは、どうもないやうである。はにかみ屋の少年は、父の顔を正視したことが殆どなかつたのかも知れない。優しい眼をしてゐる人だつたさうだが、少年には怖ろしい眼であつた。

その代り少年の記憶には、父の後姿の方が、わりあひ明瞭にのこつてゐる。この基隆埠頭における靴底もさうだし、船中の場合にしてもさうである。これは後にもしばしば繰り返されることなのだが、あるひは何かの豫兆だつたかも知れない。……

父の赴任地は臺北である。基隆から汽車で十時間ほど揺られたやうな氣がしてゐる。

この臺灣の首都は、まづ旅館のかなり宏い立派な一室として印象されてゐる。新しい疊をしきつめた、明るい部屋で、トランクや鞆の類が方々に積まれて、その部屋を自然いくつかの部分に分けてゐた。違ひ棚を背にした暗い部分には、祖母がじつと坐つて、時どき煙管をふかしてゐる。母は出入口に近い部分にゐて、手廻りの物を片づけたりなどしてゐる。廣い縁側につづいた一ばん廣く明るい區劃には、浴衣がけに寛ろいだ父が、白扇を使ひながら、磊落な大聲で來客と談笑してゐる。その客はがつしりした體に白麻の背廣をきて、四角い血色のいい顔に、黒い髪の毛を氣味のわるいほど美しく分けてゐる。初めは畏こまつて坐つたが、やがて白い上衣を傍にぬぎすて、あぐらをかき、小さな扇を器用に使ひながら、すこぶる愉快さうに辯じ立てはじめた。少年には難かしくて分らぬ話であ

る。彼は退屈になつて、ときどき鷹揚に相槌をうつてゐる父の額や、よく動く客のべつとりした唇を、交る交る眺めてゐる。縁側の外は、すだれごしに、カッと午前の陽の照りつける日本風の庭だつた。

その客が歸つて行くと、父は獨りごとのやうに、「驚くなあ、いやどうも大したものだ」と言つた。「何が？」と母が目顔で應じる。

「あれが本島人とは、知らん限り氣がつくまい。むづかしい事をよく喋りよる。」

「何をする人です？」

「△△日報の社長だといふことだ。」父は大型の名刺を疊から拾ひあげて、「いやどうも、臺灣もえらいところだ」と、太鼓腹をゆすつて笑つた。すこぶる今の客が氣に入つたと見える。小さな眼が、きらりと光つたやうだつた。

午後からも、またその翌日も、旅館の一室は客が入れかはり立ちかはりした。そのなかに、化粧品を賣りに來た商人があつた。これは内地人である。少年がよく汗疹をかくので、天瓜粉でも買ふため母が呼び寄せたのかも知れない。商人はしきりにぺこぺこしながら、疊一疊ほど化粧品の小函や小壘で一ぱいにした。母は當惑顔だつた。結局ふたつ三つ餘計なものを買はされたらしい。

商人が歸つたあとで、祖母が大トランクのかけから顔を出して、「あんまり贅澤風は吹かさんが宜しい」といつた意味のことを、ねちねちと長州辯で言ひだした。

「粉白粉だとして、わざわざ舶來品を買ひなさんと……」

母は初めは顔を伏せて、すべすべした青い小函を、何か惜しさうに指で撫でながら黙つてゐたが、

祖母がなほもくどくと言ひ募るのをみて、キッと眼をあげた。

「よく分りました。わたくしもそんな物は要りません。今すぐみんな返してしまひます。」上函を握りしめた指が、わなわなと顫へてゐた。

母は平生は無口な、おとなしい人だったが、かういふ時にはふだん抑へに抑へた東京女の勝氣さが、閃光のやうに迸つた。母は徳川の御典醫の家に末娘として生まれて、幼い頃は、吉原の裏手の田んぼの中にある宏大な邸に住んでゐたさうである。押込強盗が三四人づれで、ほとんど毎晩のやうに（これは誇張だらうが——）はいつて来て、姉妹たちの寢てゐる十疊間の蚊帳の釣手を、ばさりばざりと斬つて落す。その白刃の不氣味な閃めきや、賊たちの覆面姿の怖ろしさなどを、母はよく少年に物語つて聞かせたものである。一つには、顫る臆病で腺病質な少年を、なんとかして鍛へ直さうといふ下心があつたのかも知れない。

書院の前で、黙々と手紙か何か書いてゐた父が、そのとき穏やかな口調で二言三言いつたので、祖母はそれなりトランクのかげに引つ込んだ。

父は非常な母親孝行で、そのため祖母の前では妻の利害を無視する傾きがあつたけれど、行動が亂に走ることは決してなかつた。殊に晩年がさうだつた。まだ東京で浪人してゐた時分、健康のため禁煙を決心させられた頃の父は、隠してある煙草を出せといつて、しつこく母にねだることがあつた。母は押問答の末、しぶしぶ敷島の包を出す。その出し方が悪いといつて、父がいきなり母の胸もとへその包やマッチを投げつけたことがある。疊の上に散らばつた敷島を、じつと顎を引いてうなだれた母が、ゆつくり拾ひ集めてゐる姿を、少年は次の間から一再ならず見かけたものであつた。その顎の

不自然な引きしめ方から、少年には母の怒りや口惜し涙が、手でさはるやうに分るやうな気がした。問題になつた粉白粉のきれいな青函は、翌る日も翌々日も、封を切らずに違ひ棚の上に載せられたままであつた。少年の眼にはそれが、母の意地つ張りの結晶のやうに映じた。……

とはいへ、母はじつに忍耐がよく、この舊弊で口やかましい姑にかしづいた。祖母は間もなく死ぬことになるのだが、臨終に母の手を握つて、永年の母の介抱を謝したといふことだ。もちろん臨終にはよくある圖だが、あの頑固な祖母は、そんなことは言はないでも死んで行けた人のやうな気が、少年はするのである。少年にたいする祖母の盲目的な偏愛は、祖母と母との衝突のほとんど唯一の原因だつたが、そのたびに少年は母のきびしい躰けを内心怨みながらも、その一ぱう母のためにかなり強い義憤を覺えずにゐられぬ程度には、つむじまがりの早熟な少年であつた。要するに神経質なのである。

その旅館には一週間ほどゐて、少年の一家は或る小さな借家に移つた。

それは△△門街の或る横町にある、暗い古びた日本家屋だつた。しかし家のなかのことよりも、差當つて少年の注意をひきつけたのは、家の外の生活——とりわけ學校の生活である。東京の山の手の或る小學校で、ほんの限られた二三の友達としか交はらず、あとは家といふ小さな殻のなか——いやいつそ、更に小つぽけな内省癖といふ貝殻の中にとぢこもつて生きて來た少年にとつて、見も知らぬ外地の學校の、見も知らぬ級友たちの只中へ放りだされることは、少年にとつて紛れもない最初の社會生活の開始を意味した。

少年は怖れ、緊張した。が、案に相違して、この轉校は大した氣まつさもなく行はれたやうだ。そ

のころ日本帝國の植民地では、小學校の先生までが海軍士官のやうな紺の制服に、やはり海軍士官のやうな洒落れた短劍を吊つてゐた。少年には大そう物珍らしく感じられたけれど、べつに畏怖も嫌悪も覚えなかつた。擔任の教師は中年のやさしい男であつた。學友たちも、最初は一種の物見高さを、この内地からやつて來た顔の蒼白い生徒に示したやうだつたけれど、そのため別に齒を剃くでも、敬遠するでもなかつた。クラスの中には要するに人の好い鈍感さが支配してゐたのだ。いはば南洋ぼけである。少年は早くもそれを見てとつて、心の鎧をゆるめた。少年は三年生であつた。

ただ一つ非常に困つて、いつまでも馴染むことができなかったのは、旗とり合戦のたぐひの、源平兩陣に分れてやる遊戯が殊のほか盛んだつたことである。これは少なくとも東京でかよつてゐた小學校では、ほとんどお目にかかつたことのない種目であつた。體操の時間がくる度に、先生は「おおい、みんな、何がやりたいか？」と聞く。すると大多數の生徒が「旗とり」と答へる。紅白の鉢巻が、すばやく生徒たちの額に巻かれる。運動場の兩側にわかれて、それぞれ一列横隊に整列して向ひ合ふ。やがて號笛とともに、「天に代りて不義を討つ」とか、あるひは「遼陽城頭、夜はふけて」とかいふ軍歌を高唱しながら、次第に近づいてゆき、第二の號笛が鳴ると忽ち喚聲をあげて突撃し亂闘する。それぞれの大将の捧げてゐる軍旗を奪ひ合ふこともあるし、互ひに敵兵の鉢巻の取りつくらすることもある。第二の號笛が鳴つてしまへば、あとはぐるぐる遠心運動をしながら時をつぶすことが出来るのだが、辛いのは向ひ合つてやる軍歌行進である。これが少年には堪らなく照れくさく、彼は泣面をしてただ口を動かすだけだつた。軍歌の意味はわからず、初めて耳にする曲でもあつたが、それを嬉々として得意げに高唱して進むとき、學友たちは一人のこらず、幸福きはまる異人種に見えた。少



年は自分の孤獨をはげしく嫌悪した。

常夏の島などといふけれど、臺灣にだつて季節はある。いや少なくとも日本民族の行くところ、季節的な行事はどこへでもついて廻る。よしんば北極へお國替へを命ぜられたにしても、彼らはやはり揃ひの浴衣で樽神輿をかつぐだらう。

やがて秋が深くなると、少年の一家は揃つて松茸狩りに出かけた。場所は淡水河の河口に近い、北投といふ温泉場である。父の役所の下役らしい顎鬚を生やした男が、案内兼世話役について來た。

温泉場そのものの記憶は、全くないと言つていい。微かな嫌悪感らしいものが残つてゐるだけである。おそらく日本流に俗化した、白ちやけた湯治場だつたのだらう。これまた日本人の行くところ、必ずついて廻る現象である。松茸狩りの記憶もすこぶる稀薄だ。山道など、少年の趣味ではないのである。ただ印象に焼きついてゐるのは、陰惨なまでに暗い次のやうな情景だけだ。――

夕闇か、それとももう日が暮れてゐたのか、とにかく、恐ろしく暗い松の木だらけの坂道である。赤黒い提灯か何かの光をたよりに、によきによき突き出てゐる松の根っこを避けながら、同勢四五人でその道を上り下りしてゆく。少年もその中にゐて心細い。

「お危うございますよ、お氣をつけなすつて」と、誰やらが言ふ。

「いやもうぢきです。ついこの上のところ、宿の者に仕度をさせてあります」と言つたのは、例の顎鬚の男である。